

ゼカリヤ書3-4章「主の二人の指導者」

1A 義と認められる神 3

1B 大祭司の清め 1-5

1C サタンの訴えを責める主 1-2

2C 新たな礼服 3-5

2B 一つの若枝 6-10

1C 宮を治める者 6-7

2C 七つの目のある石 8-10

2A 御霊による働き 4

1B 油注がれる燭台 1-3

2B 権力や能力ではない力 4-10

1C 御霊による神殿建設 4-7

2C 完成させる手 8-10

3B 二人の証人 11-14

本文

ゼカリヤ書3章を開いてください。私たちは、ゼカリヤの見た幻に入っています。エルサレムでは、神殿の建設が再開されてから間もなく、ゼカリヤに主が八つの幻を与えられました。初めに、赤い馬の乗られた方が、ミルトスの木の間に立っておられました。そして他に三頭の馬が地を行き巡りましたが、いたって平穏でした。しかし主は怒られました。なぜなら、その平穏は安逸を諸国が貪っている姿であり、そのためにご自分の民であるユダヤ人が虐げられ、エルサレムが廃墟となっていたのです。私たちが今の平穏な生活をしている中で、福音によって生きようとすればとてつもない圧力がかかります。そこで主は、エルサレムを再び選び、憤りを持ちながらそれを愛すると言われました。そのエルサレムへの慰め、神の妬むような愛を私たちは読んでいっています。

この、谷底の赤い馬の幻が第一の幻ですが、第二の幻は四つの角と四人の職人の幻です。角は力を表していて、ユダヤ人を世界に散らした力です。バビロン、ペルシヤ、ギリシヤ、そしてローマです。けれども、主はその角を削り落としてしまう、職人をも立たせました。バビロンを倒すのにペルシヤを用い、けれどもそのペルシヤも高ぶり角となった。それでギリシヤによって削り落とされ、今度はギリシヤが高ぶった。そしてローマによって削り落とされ、しかしローマは終わりの日に大きくなる角をもたらします。反キリストです。しかし、最後の四人目の職人たるイエスご自身がその角をへし折られます。

そして第三の幻は、エルサレムを測る測り縄です。そこを測ろうとしたら、そこには城壁がありま

せんでした。なぜなら、大勢の人々が来て、家畜も増えるからです。しかし、主ご自身が、その火によって城壁となってくださいます。主のご臨在によって、その聖い火によって、エルサレムの住民は敵に脅かされることなく、生活できるという保障です。それから主は、バビロンから逃げなさいと呼びかけておられます。バビロンは、とても安定し、住み心地がよく、エルサレムが廃墟となり、生活が困難だけれども、主はエルサレムをご自分の住まいとされ、バビロンは滅ぼされます。ですから、主の働きは、私たちに天のエルサレムを望ませ、バビロンのように世の愛から離れるように促しておられます。

1A 義と認められる神 3

そして今日は、第四の幻と第五の幻です。私たちはここで、エルサレムの神殿再建において、それを指揮している二人の指導者のことを思い出す必要があります。総督ゼルバベルと、大祭司ヨシュアです。エズラ記に、そしてハガイ書にも、必ず二人が一对になって、名前が並んでいます（ハガイ 1:12 等）。一方は、ダビデ王朝の末裔、もう一方はアロン族の末裔であり、その両者が神殿に取り組む時に、主は一つの大きな幻をお見せにます。それは、その神殿の再建と共に、その両者が一人になる姿です。王であるのに祭司であられる方、すなわちメシヤ、キリストです。主は、この二人の指導者に、その働きに従事することができるように回復を与えられます。3 章では、大祭司ヨシュアで、彼が汚れを取り除かれ、主の前に立つことができるようにしてくださいました。そして、4 章ではゼルバベルで、主の御霊によって、工事の働きを完成させることができるようにしてくださいます。

1B 大祭司の清め 1-5

1C サタンを訴えを責める主 1-2

1 主は私に、主の使いの前に立っている大祭司ヨシュアと、彼を訴えようとしてその右手に立っているサタンとを見せられた。

主は今、主の使いや他の御使い、そしてサタンのいる天の情景を見せています。大祭司ヨシュアが主の前でどのようになっているのか、天においてそれが生々しく裁判の法廷のように告発が行なわれていました。告発者はサタンです。「主の使い」がここにおられます。私たちは既に、主の使いがイスラエルのために、天の主を訴えている場面を見ました。そして、2 章にも、主がわたしを遣わしたと言われて、主の使いが出てきます。この方が、神の民を守り、救うために戦っておられます。聖書の他の箇所でも、主の使いがイスラエルのために戦われるのは、ヨシュア記で見ることができます。ヨシュアがエリコを偵察に来た時に、抜き身の剣を持っていました。そして、「わたしは主の軍の将として、今、来たのだ。(5:14)」と言われました。詩篇 35 篇にも、主の使いがダビデのために戦ってくださることが書かれています(1-5 節)。今、その主の使いの前で、サタンが大祭司ヨシュアを訴えています。しかし、主の使いがこれから擁護されます。

大祭司をこのように訴える、告発するということは、イスラエル全体がそのように訴えられていることと等しいです。なぜなら、祭司は主の前に民のこを取り持つ仲介者だからです。主の聖なる所に入り、そこで受けたものを民に祝福として分かち合う働きがある一方で、民の罪を負って、それをいけにえを捧げることによって主の前に赦していただくという働きがあります。イスラエルの民は、七十年のこと捕囚の民としてバビロンにおり、そして今、エルサレムに戻っていますが、サタンは彼らがまだ、主の前に汚れているとして告発していたのです。サタンは、このようにして主にある兄弟たちを告発する働きを絶えず行なっています。「黙示 12:10 私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。」

サタンの主な働きはこれです、「キリストにある者を責め立て続ける」ことです。私たちは、自分の犯した罪を悔い改め、十字架にあってその重荷を降ろしました。「1ヨハネ 1:12 子どもたちよ。私があなたがたに書き送るのは、主の御名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。」罪の赦しを得ているはずですが、サタンは私たちの良心を弄り回し、神からまだ怒りを受けている、神に受け入れられていないと巧妙にだまします。サタンは、罪定めをします。けれども、聖霊は罪を自覚させます。罪に定めるのと、罪を自覚させることの違いは天と地が離れているように、違います。罪に定めるのは、自分をキリストの十字架から引き離すことになります。罪の自覚は、キリストの十字架に自分を連れて行くことです。キリストの十字架から自分が離れるようにさせていけば、それはサタンの惑わしです。キリストの十字架に向かい、そこで神の憐れみを受けるのであれば、それは聖霊の働きです。

人を罪に定める時に、サタンは多くの場合、私たちの罪を的確に責め立てます。ゆえに、その訴えは信憑性があるように見え、私たちは凹むのです。それが明らかに嘘であれば、退けるのは易しいのですが、本当のことを言われるので自分を責めるのです。けれども、主は弁護者であられます。「1ヨハネ 2:1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護して下さる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。」サタンは、検察として、やれるだけの訴状を私に突き付けます。そして、弁護人であるイエス様が出てこられます。主は言われます。「これらは、全てその通りです。」えっ！！そんなことはあってはなりません。私を弁護するはずなのに、訴状を認めてしまったらどうするのですか？けれども、イエス様は言われます、「これらの罪状について、全てわたしが十字架に付けられた時に、罰せられました。わたしが全て、その罰金を支払いました。」それで、この裁判は終わりです。父なる神は、サタンの訴えをみな却下します。

これが、神が私たちを義と認める、ということです。私たちの行なったことを正当化するものではありません。キリストが十字架で行なわれたことに基づいて、私たちを無罪と宣言されます。

2 主はサタンに仰せられた。「サタンよ。主がおまえをとがめている。エルサレムを選んだ主が、お

まえをとがめている。これは、火から取り出した燃えさしではないか。」

主の使いであった方は、今、ここで「主」と呼ばれています。ですので、多くの聖書学者はこの方は、受肉する前にイエス・キリストであると話します。ヨシュアを訴えていたサタンを、かえって責められます。主は、私たちに同じ事をしてくださいます。私たちが訴えるサタンを、かえって責められるのです。どのように？初めに、「エルサレムを選んだ主」とあります。選ばれたゆえに、サタンはヨシュアを訴えられませんが、選びと言いますと、私たちは優れた者が選抜されるという意味合いで使いますが、聖書ではその反対の意味です。つまり、主がもっぱら憐れまれて、選ばれるのです。それは孤児院にいる子を、養子縁組にしようとして選ぶ親に似ています。主は、選びにおいて憐れみを示しておられます。「申命 7:7-8 主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。」このようにして、主は弱き者、取るに足りない者、そうした者だからこそ憐れんで選び、そしてご自分の子として育てようとしているのです。そうした者に対して訴える者がいても、主がかえって責められます。「ローマ 8:33 神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。」

そして、「火から取り出した燃えさしではないか」と言われます。これは、火によって燃えつくされるところから、かろうじて救われたということ（アモス 4:11 参照）。主は、イスラエルの民に火の中をくぐらせるようなことをされました。バビロンによってエルサレムが破壊され、もう彼らは終わりであるかのようでした。ところが、まだ残りの者たちはいました。エレミヤも、哀歌で、今こうやって生きているということ、これこそが主の慈しみだと言ったところがあります。そして今、ユダヤ人たちが帰還しています。主が、ご自分の民を裁かれる時は懲らしめのためであり、かえって彼らが罪の中で滅びることから救うためです。コリント第一 11 章 32-33 節にも、キリスト者に対する主の取り扱いも同じだということを、話しています。「しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。」

2C 新たな礼服 3-5

3 ヨシュアは、よごれた服を着て、御使いの前に立っていた。

この「よごれた」のヘブル語は「肥溜め」であります。単に汚れたのではない、肥溜めの中に漬かっていた、ものすごく汚い服を身にまとっていたのです。これがエルサレムの神殿を破壊せしめる汚れた行為でありました。同じような表現が、イザヤ書 64 章 6 節にもあります、「私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。」ここでの「不潔の着物」は、女性の月のもので汚れた布を表します。レビ記にある不浄の期間の時に、汚れた布です。こうや

って私たちが主の前に、汚れているのだということ、どんなに正しいことをしたところで、汚れたものなのだという、圧倒的な墮落を言い表しています。

4 御使いは、自分の前に立っている者たちに答えてこう言った。「彼のよごれた服を脱がせよ。」そして彼はヨシュアに言った。「見よ。わたしは、あなたの不義を除いた。あなたに礼服を着せよう。」

ここに、主のすばらしい、恵みの御業があります。罪を根こそぎ、全く取り除き、洗い清めるということです。「詩篇 103:12 東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。」ここで、汚れた服から礼服に着替えるという行為は、キリストが行なわれたことを上手に表わしています。ただ、私たちが汚れから清めただけではないのです。キリストの義という、美しい礼服を私たちが身につけさせてくださったのです。ただ、神の前にかろうじて出て行けるということではなく、父なる神の祝宴の場に招かれ、招かれた席に座らせていただくという栄誉、恵みにあずかっているのです。キリストの義を身にまとっているのですから、そうなのです。これこそが、神の恵みの骨頂です。

そしてここでの礼服は、大祭司ヨシュアが着ているので、装束のことでしょう。それは、「栄光と美を表す聖なる装束(出エジプト 28:2)」と呼ばれています。それは、キリストの栄光と美を表すものでした。エポデは、紫、金、緋色、白、青の撚糸で織られます。そこには、王なるキリスト、神の栄光としての金、血を流された緋色、清さを示す白、天を示す青です。そして、肩当があり、そこには十二部族の名が記されています。キリストが迷った羊を見つけて、羊をかつぐ羊飼いのように、イスラエルの民を担いでおられます。そして胸当てがあり、そこにも十二の宝石が埋められています。主の御胸の中に各部族を抱いておられるということです。礼服の一つ一つに、キリストの栄光と美が表れています。

5 私は言った。「彼の頭に、きよいターバンをかぶらせなければなりません。」すると彼らは、彼の頭にきよいターバンをかぶらせ、彼に服を着せた。そのとき、主の使いはそばに立っていた。

ゼカリヤは、若い祭司でした。彼は、この出来事を驚きと喜びを持って見ていたことでしょう。思わず、「ターバンを被らせなければいけない」と言いました。これもまた、祭司の礼服の中の一つで、主の前に出る時に、それを被り、イスラエルの民を執り成していました(出エジプト 28:36-38)。アロンが祈りの中で彼らの咎、罪を思って、それで贖っていただけるように祈るのです。それをキリストが、私たちのために天において執り成しをしておられるということです。「ローマ 8:34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。」

2B 一つの若枝 6-10

1C 宮を治める者 6-7

6 主の使いはヨシュアをさとして言った。7 「万軍の主はこう仰せられる。もし、あなたがわたしの道に歩み、わたしの戒めを守るなら、あなたはまた、わたしの宮を治め、わたしの庭を守るようになる。わたしは、あなたをこれらの立っている者たちの間で、宮に出入りする者とする。

回復させたヨシュアに対して、主が以前と同じように、神に仕えるように命じておられます。主の言われたことを行なう、このシンプルなことを行なっていれば、つまり忠実であれば、主ご自身が多くのものを任せてくださるようになります。ヨシュアは、神の宮を治めるように任されます。あくまでも神の宮であって、自分のものではありません。彼はただ、しもべにしか過ぎません。それから、神の庭が、宮の外の敷地にありますが、そこも守ります。

そして、驚くことは「あなたをこれらの立っている者たちの間で」と言われていることです。彼らは、おそらく主の使いの下で動いている御使いたちのことでしょう。つまり、ヨシュアが主の宮で仕える時に、そこは御使いたちの見ているところで行なうということです。このように、宮を行き来することができる恵みは、キリスト者にも与えられています。「ローマ 5:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」導き入れられた、という言葉は、アクセスがあるという意味です。入っていくことができるということです。主の前のごとくに、私たちが恵みによって入れられました。

2C 七つの目のある石 8-10

8 聞け。大祭司ヨシュアよ。あなたとあなたの前にすわっているあなたの同僚たちは、しるしとなる人々だ。見よ。わたしは、わたしのしもべ、一つの若枝を来させる。

主が、ヨシュアを恵みによって、完全に立ち直らせた後に、驚くべき約束を、その同僚たちと共に与えられます。それは、「わたしのしもべ、一つの若枝」、すなわちメシヤ、キリストです。彼らが今、帰還した小さな集団ユダヤ人を率いています。彼らの前には、後に来られるキリストご自身がおられました。

まず、「わたしのしもべ」というのは、イザヤが見た幻の中にあります。「42:1-3 見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。」そして、若枝というのは、11 章 1-2 節に出てきます。「エッセイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。」その他、52 章 13-15 節、53 章 1-2 節にも書かれています。

それらを総合すると、御国をもたらすメシヤが、地上において贖いの働きをされ、ついに民の咎のためご自身が苦しみを受けるという流れが見えてきます。まさに、イエス様によって実現したものです。

9 見よ。わたしがヨシュアの前に置いた石。その一つの石の上に七つの目があり、見よ、わたしはそれに彫り物を刻む。・・万軍の主の御告げ。・・わたしはまた、その国の不義を一日のうちに取り除く。

続けて、メシヤの呼び名が出てきました。わたしのしもべ、若枝に続き、ここでは「石」です。石は、聖書の中で救い主としてしばしば出てきます。動かず、揺らぐことのない姿。巖の中に隠れたら安全、そうしたことから石が主ご自身、そしてメシヤに使われています。ダニエル書 2 章で、人の像の夢に、人手によらずに切り出された石が山となったということがでできます。詩篇にある言葉を引用して、イエス様がユダヤ人指導者に言いました、「マタイ 21:42 あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなされたことだ。私たちの目には、不思議なことである。』」そして、ローマ 9 章 31-33 節には、救いの岩になると同時に、躓きの石にも岩にもなることを、教えています。

それから、「七つの目」があります。七つというのは完全数で、神の数です。先にイザヤ書 11 章によれば、主は御霊に満たされ、知恵や知識についての御霊の七つの特徴が書かれていました。イエス様の姿が、黙示録 5 章 6 節に書かれているのですが、「さらに私は、御座・・そこには、四つの生き物がいる。・・と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。これに七つの角と七つの目があった。その目は、全世界に遣わされた神の七つの御霊である。」とあります。小羊にあった七つの目とは、七つの御霊、全世界に遣わされた七つの御霊だとあります。そうです、聖霊の働きです。イエス様に御霊が留まり、そして御霊は全世界に対して全てを見通している知識を持っておられます。

さらに、刻印が石にあります。これは、キリストの御名が刻まれていることでしょう。「黙示録 2:17 わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受け取る者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。」誰も知らない、新しい名です。そして、誰も知られていない名は、主イエスご自身についています。「19:12 その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。」

そして、この石で、七つの目があり、かつ名前が刻まれている方が、「不義を一日のうちに取り除く」というのです。これは福音です。一日のうちに、というのが大事です。徐々にではありません、主が罪を赦し、清められるのは、全てを清めるというところから始まります。「1ヨハネ 1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪か

ら私たちがきよめてくださいます。」私たちが罪の赦しを受ける時、この一日にしての取り除きを覚えましょう。そしてイスラエルの民には、終わりの日に新しい契約による罪の赦しが約束されています(エレミヤ 31:34)。

10 その日には、..万軍の主の御告げ。..あなたがたは互いに自分の友を、ぶどうの木の下といちじくの木の下に招き合うであろう。」

木の下における友との語らいの約束がありますが、これは平和と安全を象徴している風景です。神の御国における平和を示しています。ミカ書4章 3-4 節を読みます。「主は多くの国々の民の間をさばき、遠く離れた強い国々に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。彼らはみな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下にすわり、彼らを脅かす者はいない。まことに、万軍の主の御口が告げられる。」このように、罪と汚れから清められることによって、心の平安だけでなく、将来には国と国との平和まで保障されています！

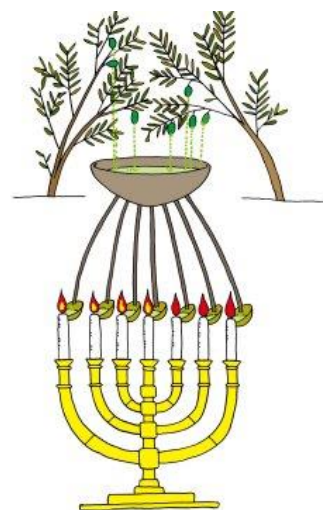
2A 御霊による働き 4

そして4章は、ゼルバベルに対する預言です。

1B 油注がれる燭台 1-3

1 私と話していた御使いが戻って来て、私を呼びましたので、私は眠りからさまされた人のもようであった。

4 章における幻を見た後に、夜ですから少し眠ってしまったのでしよう。それで、御使いから起こされます。



2 彼は私に言った。「あなたは何をみているのか。」そこで私は答えた。「私が見ますと、全体が金でできている一つの燭台があります。その上部には、鉢があり、その鉢の上には七つのともしび皿があり、この上部にあるともしび皿には、それぞれ七つの管がついています。3 また、そのそばには二本のオリーブの木があり、一本はこの鉢の右に、他の一本はその左にあります。」

ゼカリヤは、ヘブル語で「メノラ」の幻を見ました。これは、出エジプト記 25 章 31-40 節までに書いてある、主がモーセに造りなさいと言われた、主の幕屋の用具の一つです。純金で作られ、アーモンドの形をしています。七つの枝があり、それぞれの上に、灯皿があります。そこに油を絶えず、入れます。それで、聖所の中がいつも光っているようにするためです。祭司たちが、主から絶やすことがないように命じられました。「出エジプト 27:20 あなたはイスラエル人に命じて、燈火用に上質の純粋なオリーブ油を持って来させ、ともしびを絶えずともしておかなければならない。」

ところが、ここでの大きな特徴は、その祭司たちの務めを必要としていないことです。後ろの二本のオリーブの木から管が出ていて、それで七つの管が出ていて、それで絶えず灯が灯されているのです。つまり、祭司たちの行ないがなく、この灯があるということです。

2B 権力や能力ではない力 4-10

1C 御霊による神殿建設 4-7

4 さらに私は、私と話していた御使いにこう言った。「主よ。これらは何ですか。」5 私と話していた御使いが答えて言った。「あなたは、これらが何か知らないのか。」私は言った。「主よ。知りません。」6 すると彼は、私に答えてこう言った。「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。

ゼカリヤがこの幻を見て御使いに尋ね、御使いは彼に逆に尋ねて、そしてゼカリヤが「知らない」と答えるようにさせました。知らないということを知ることは、必要です。それで、初めて聴くようにして、これからの主の言葉を聞いています。それが、「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。」ということです。午前礼拝の説教を後でお聞きください。光というのは、イザヤ書のメシヤについての預言であったように、国々を照らす光です。そして、キリストの弟子たちも世界の光ですと、イエス様から言われています。主ご自身が、「わたしは世の光です」と言われました。

ゼルバベルたちが、今、その光として召されています。けれども、そんなことは到底、あり得ないと感じています。自分たちは抑圧されている。そして神殿は資材や人材が足りず、ままならない。そんな中でどれだけの、神の証しを立てることができるのだろうか？とっていました。しかし、主は、「わたしの霊によって」と言われます。天地を造られた御霊です、できないことはありません。燭台に注がれる油が、聖霊を示しています。「1ヨハネ 2:27 あなたがたのばあいは、キリストから受けた注ぎの油があなたがたのうちにとどまっています。それで、だれからも教えを受ける必要がありません。彼の油がすべてのことについてあなたがたを教えるように、..その教えは真理であって偽りではありません。..また、その油があなたがたに教えたとおりに、あなたがたはキリストのうちにとどまるのです。」聖霊の力によってのみ、光となることができます。

7 大いなる山よ。おまえは何者だ。ゼルバベルの前で平地となれ。彼は、『恵みあれ。これに恵みあれ。』と叫びながら、かしら石を運び出そう。」

「大いなる山」とは、彼らが直面している大きな課題です。彼らを阻んでいるものです。それが、一気に取り除かれます、平地になります。御霊が働かれる時は、十年かかってできなかったことも、一秒もかからないで主は成し遂げてくださいます。ですから、恵みの働きです。聖霊が働かれる時は、必ず神の恵みが表れます。神の恵みは、信仰によるものであり、御霊によるものです。自分で何かをした、というものが無いのです。御霊が一方的に、圧倒的に行なってくださいます。

そして、「かしら石を運び出そう」と言っています。これは、神殿において建物の構造上、最も大事な石とされているところです。礎石とも言いますし、親石とも言います。これを持って来て、喜びながらかしら石を置いて、建設を進められるということです。そして、これは霊的な意味も含まれるでしょう。先ほど、ヨシュアの前に置かれた石です。メシヤのことです。キリストというかしら石が、建物の礎として置かれます。そこから、神の建物が建てられます。

2C 完成させる手 8-10

8 ついで私に次のような主のことばがあった。9 「ゼルバベルの手が、この宮の礎を据えた。彼の手が、それを完成する。このとき、あなたは、万軍の主が私をあなたがたに遣わされたことを知ろう。10 だが、その日を小さな事としてさげすんだのか。これらは、ゼルバベルの手にある下げ振りを見て喜ぼう。これらの七つは、全地を行き巡る主の目である。」

主は、御霊による、恵みによる神殿建設の働きにおいて、ゼルバベルがしっかりと下げふりをもって、その手を使って関わっているけれども、それが最後の時までそうしているということを話しています。下げ振りとは、測量の道具です。それを持って、喜んでいるのです。つまり、最後まであきらめないということです。主に対して忠実に仕えている時に、時にその手を祝福してくださいます。主が、必ず、良い働きを完成してくださいます。「ピリピ 1:6 あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は強く信じているのです。」私たちも、その与えられた救いを恐れかしくみつづ達成するということです。主に与えられたものをしがみついていきます。そうすれば、主が必ず完成させてくださいます。ちなみに、「万軍の主が私をあなたがたに遣わされたことを知ろう。」とありますが、これは、主の使いがご自身のことを話しています。

ここに、「その日を小さな事としてさげすんだのか。」ということですが、ハガイ書 2 章に合った言葉でした。ソロモンの神殿の栄華と比べたらあまりにも見た目が悪いものだったからです。そこで私たちは落胆します。「こんなにやっているのに、この位の成果しか上げることができなかった。」と言ってがっかりします。けれども、自分のしていることをやめてはならないのです。どれだけの成果を上げるのかには、私たちは責任がありません。それは主が持ってくださいます。けれども、道具を手放さないことについては私たちに責任があります。

そして、「これらの七つは、全地を行き巡る主の目である。」とありますが、これは、先のヨシュアの前にあった一つの石にあった七つの目のことでしょう。主が御霊によって働かれる時に、全地を行き巡るようにして見ておられます。つまり、これは世界的な視野で起こることであり、単にゼルバベルが建てている神殿を越えて、世界が神の国になるまでの御霊の働きであると考えられます。

3B 二人の証人 11-14

11 私はまた、彼に尋ねて言った。「燭台の右左にある、この二本のオリーブの木は何ですか。」
12 私は再び尋ねて言った。「二本の金の管によって油をそそぎ出すこのオリーブの二本の枝は何ですか。」13 すると彼は、私にこう言った。「あなたは、これらが何か知らないのか。」私は言った。「主よ。知りません。」14 彼は言った。「これらは、全地の主のそばに立つ、ふたりの油そそがれた者だ。」

ゼカリヤと、御使いの押し問答が続きます。燭台については、その油については主の御霊の働きであることが分かった。それによって、ゼルバベルが神の恵みを知り、大きな山が平地にあるのを知ります。それから、彼がふり下げをずっと持っていることによって、主が建て上げを完成させていただきます。けれども、この二本のオリーブの木の意味が分かりません。それで、ゼカリヤは再び、「知りません。」と答えます。それで御使いが言ったのは、主の前に立つ、二人の証人であるということです。

大祭司ヨシュアに対するのと同じく、主は、ゼルバベルに対しても将来のメシヤの預言を与えてくださっています。オリーブの木は、「ふたりの油そそがれた者だ」とあります。「油注がれた者」のヘブル語はそのまま「メシヤ」です。ヨシュアとゼルバベルの二人が、将来のメシヤを証する者たちだ、ということです。

終わりの日には具体的に、主の到来の前に二人の証人がエルサレムに立ちます。黙示録 11 章に書いてあります。「11:1-6 それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。「立って、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。聖所の外の庭は、異邦人に与えられているゆえ、そのままに差し置きなさい。測ってはいけない。彼らは聖なる都を四十二か月の間踏みこむ。それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する。」彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。」ヨハネの黙示録」彼らが立っていたのは、神殿の前でした。けれども、外側は異邦人に荒らされている偽物の神殿でした。彼らは文字通り、口から火を吹いて預言を行ない、あらゆる災害をもたらす力を持っていました。ダニエル書 9 章 27 節にある最後の七年間の前半部分での出来事です。反キリストがその半ばで現れて、彼らは殺されますが、三日半後に生き返り、天に引き上げられます。

この二人が、神殿の完成に向けて、偽物の神殿の前で、これではなく、次に来る神殿であることを証していたのです。御国にある神殿を証していました。彼らは、目の前でいろいろな阻害要因があったのですが、それでも、この終わりの日の幻にある神殿、キリストにある神殿を見て、それで目の前のことを見ないで、しっかりと証しを立てるのです。